

48 七言古詩・五言律詩 貫名海屋

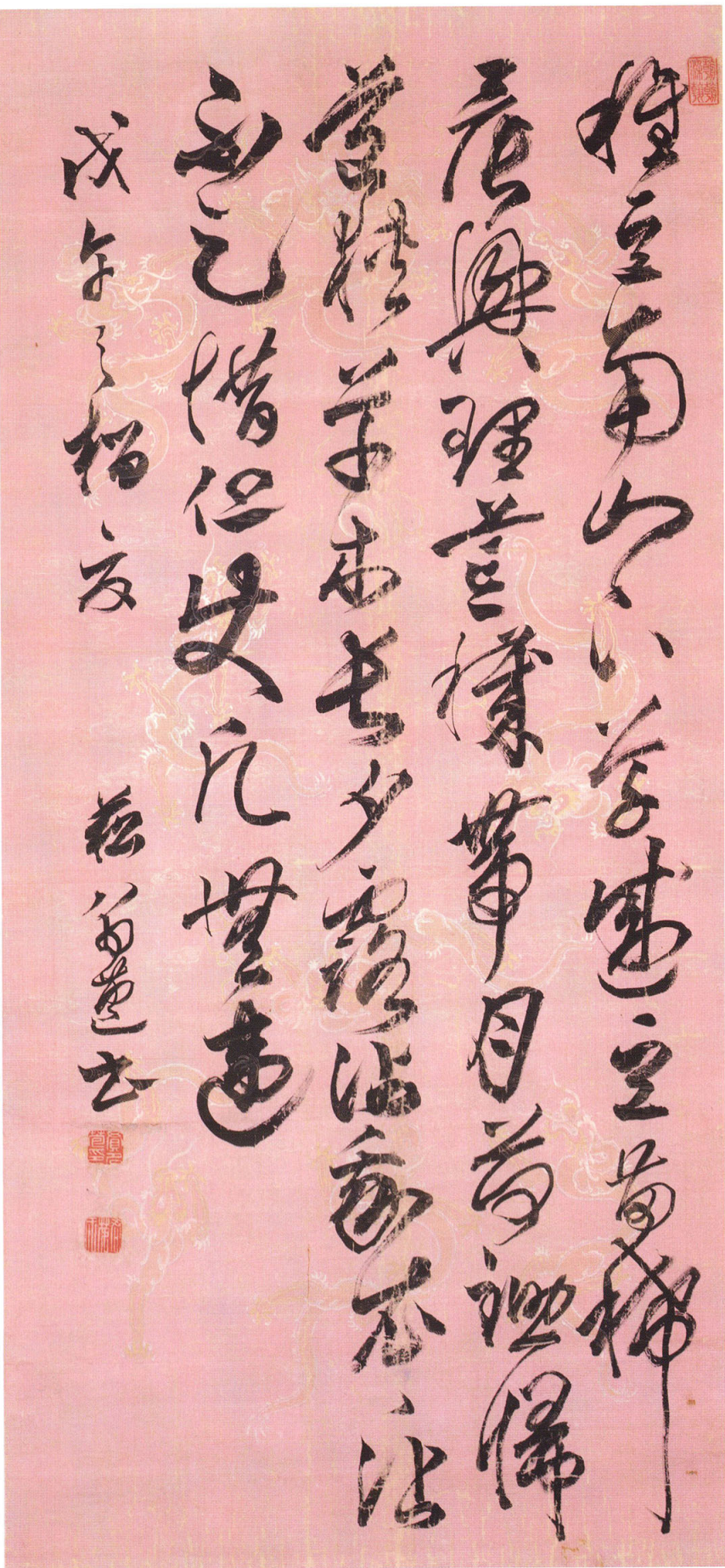
彩箋墨書 各一六四・〇×七五・八
江戸時代、安政五年（一八五八）

対幅 〔三の丸尚蔵館〕

貫名海屋（一七七八〜一八六三）は、幕末の儒学者であり、書家、画家としても名をなした人物である。阿波藩士の家に生まれ、名は苞（しげる）、字は子善、君茂、号は海屋の他に海仙、海客、林屋、晩年には松翁などとした。十七歳で高野山にのぼり空海の筆跡に傾倒し、三十四歳で京都に移り、儒者として身を立ててからも、法帖を熱心に蒐集してその臨書に努め、王羲之や孫過庭などの正統的な晋唐の書風を受け継いだ。また、五十九歳で長崎に遊学した際には鉄翁に南宗画を学んだ他、舶載された法帖を入手して董其

昌などの明清の書風も学んだ。海屋は、市河米庵、巻菱湖とともに幕末の三筆と称されたが、明治の書家日下部鳴鶴が私淑するなど、三筆の中で最も後世へ影響を与えた人物と言える。

本作品は海屋晩年八十一歳の時の作品。七十代以降に主に用いられる「松翁」の署名が認められる。本作品をはじめとして、晩年において海屋の書は、晋唐の書法に基づく堅実な運筆からやや変化を見せ、流れるような草書体が目立つようになる。また本作品は海屋の書としては珍しく、美しい下絵の描かれた料紙が用いられている。七言古詩の方は、縹色に金銀泥で蓮池水禽の図が描かれ、五言律詩は、薄い朱色に同じく金銀泥で様々な姿態の龍が巧みに描かれる。文人画家としても高く評価された海屋ではあ



るが、この料紙下絵は画風の点から別人の筆と思われる。ただ、この料紙装飾の可憐で上品な美しさを損なうことなく、むしろその装飾性と共鳴するように、たつぷりとした筆を流麗に走らせながら、部分的にかすれを織り交ぜて変化をつけている点からは、海屋が晩年にいきついた書風の高い境地がうかがえる。ここで海屋が取材した漢詩は、杜甫が仕官の道を捨て田園暮らしへの思いを馳せる詩「曲江三章」と、陶淵明が耕作に打ち込む喜びを詠った「帰田園居」の中の一首である。いずれも、都を離れて自然の中で田畑を耕す質素な生活について詠ったものである。こうした詩のイメージや装丁の共通性などから、当初より対幅として制作されたものと思われる。

（七言古詩）

自断此生休問天、杜曲／頼有桑麻田、故將移住南／山辺、短衣匹馬隨李広、看／射猛虎終殘年、／松翁苞書

（五言律詩）

種豆南山下、草盛豆苗稀、／晨興理荒穢、帶月荷鋤歸、／道狹草木長、夕露沾我衣、夕沾／不足惜、但使凡無違、／戊午之榴夏、松翁苞書

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

書の美、文字の巧

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 74

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

宮内庁書陵部

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十八年九月十七日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sanmonmaru Shozokan
The Archives and Mausolea Department
Imperial Household Agency